Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」（日本語版）

入賞作品

公益財団法人日本科学協会
業務部 国際交流チーム

目　次

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」（日本語版）　一等賞作品

華東師範大学　日本語翻訳　博士１年　丁永恒 4

浙江大学　日本語専攻　３年　丁奕臻 4

復旦大学　日本語専攻　３年　張靖苒 5

三江学院　日本語専攻　４年　冯欣雨 7

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」（日本語版）　二等賞作品

広州大学　日本語専攻　４年　林家和 9

大連民族大学外国語学院　日本語専攻　３年　杨灏 10

佳木斯大学　日本語言語文学　３年　李莹莹 12

北京大学　日本語専攻　修士１年　杨云骢 13

上海初盟教育科技股份有限公司　日本語専攻　修士１年　王璐儿 14

浙江越秀外国語学院　日本語専攻　４年　蓝梦轩 15

北京第二外国語学院　日本語翻訳　博士１年　万里鹏 17

吉林財経大学　日本語専攻　３年　方佳锘 18

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」

（日本語版）

一等賞作品

「余白」を駆使する鬼才

華東師範大学

日本語翻訳　博士１年

丁永恒

横光利一の『蠅』は簡潔でドラマチックだ。舞台は真夏の宿場である。車夫はただ饅頭を食べたいがために出発しようとせず、乗客たちは待ち呆けていた。そしていよいよ馬車は出発したが、皆は崖の下へ墜落する運命を迎えてしまった。出発前、厩の蜘蛛の巣から抜け出した蠅だけが、唯一の生存者となった。

この小説は独特の風格を備えており、「余白」が最も目立つ特徴だと思う。

その一つ目は人の「余白」について。墜落死前の事件が主要な部分を占めているが、墜落死までは、人の間の会話は出発をめぐる議論と自分の状況の説明に止まり、これ以上はない。これは人の間の「余白」だ。一方、それぞれの人に属するストーリーも、会話の中にほのめかされるだけで、前後関係がはっきりしない。これは人それぞれの「余白」だ。この二重の「余白」が重なっているが、皆は運命に強制的に縛られ、一緒に墜落する、という避けようのない事故を迎え、小説は一見荒唐無稽のように見える。

二つ目は蠅の「余白」について。実際に、蠅の存在意義はすぐに現れるものではない。詳しく言えば、蠅は最初から最後までただの傍観者で、いなくても小説は成立する。更に、小説は全部で十章に分かれており、第一章は蠅を簡潔に描いているが、後はすべて人のストーリーだ。終わりに向かう第九章になり、やっと蠅が再び現れる。それ以前は、蠅の役割がはっきりしないと言える。しかし、この「余白」は逆に人と蠅を関連付けると思う。最初に登場したが、すぐに退場したという蠅の特性は、読者が人の部分を読んでいる時、「人」の背後に「蠅」という存在があることを暗示する。また、人々は自分のことだけを訴え、他人への関心は表面的であることから、本質的には車夫と同じく、また蠅とも同じく冷たく傍観する存在だとも言える。言い換えれば、蠅と人は重なり合い、蠅の存在意義の「余白」は人の「余白」と交差する。

「余白」はキャラクターを除き、事件にも作用する。車夫は確かに利己的に見える。しかし、そう断言できるのだろうか。作者は主婦の口を借り、「先刻出ましたぞ」という台詞で答えた。つまり、いつ発車するかを明らかにせず、すでに一便発車したという事実を伝えただけだ。これは情報の「余白」だ。なので、再び乗客の数が適切になるまで待つのも理にかなっているようだ。一人のために早めに発車すると、かえって後から来る乗客の利益を犠牲にすることになるだろう。実際、乗客たちの催促も自分の都合によるもので、合理的な発車時間に基づいているものではない。創作動機から見れば、純粋な利己性を表現したいなら、この台詞は不要だ。この「余白」は正に「皆利己的である」という皮肉

だ。
　横光利一は、すべての細部を詳述せず、大胆に「余白」を駆使して小説を構成している。これは天才的な作家である証だ。

『蠅』

死から生へ

浙江大学
日本語専攻　3年
丁奕臻

　「今こそ蒼海の底に沈まんとおぼしめし候ふとも、つひには紫雲の上にこそのぼらせ給はんずれ。」
　『平家物語』「維盛入水」の章にあるこの一文が、山田尚子監督によって監修された同名のアニメではビジュアル的に表現される。人々の誦経が響く中、維盛は穏やかに水に沈んで行く。その姿は、宛ら那智の海が紫雲を映し出す空へ舞い上がっていくかのようだ。
　平維盛は平清盛の嫡孫で、十九歳の時、桜と梅をかけて宮宴で「青海波」を舞った。その清らかな姿に驚いた人々によって、「桜梅少将」と名付けられた。宇治橋で平家と平等院が激突した際、黒ずんだ兵士の中に白馬に騎乗した維盛の姿はひときわ際立った。アニメは橋合戦の結末を直接語っておらず、出陣を余儀なくされた維盛の個人的な感じを際立たせて描く。川越しを急ぐ喘ぎ声と死傷による泣き声に伴って、維盛が目にしたのは天に広がった烽火と、地面に散らばった死骸だけだった。急に音声が止まり、画面は暗闇の中で維盛の片目に固定され、そして戦場に立った維盛の姿に切り替わり、しばらくすると再び彼の潮垂れた目に戻る。
　では、軍記物語をベースにしたアニメで、なぜ戦争に苦しんだ平維盛を描くためにこれほどの工夫が凝らされたのだろうか。その理由は、維盛に代表される戦争中の個人の浮き沈みを通して、「死に向かって生きる」という道理を明らかにしたいからだと思う。
　アニメのテーマ曲の歌詞「最終回のストーリーは、初めから決まっていたとしても、今だけはここにあるよ」とあるように、平家の意気軒高たる姿勢を目の当たりにすると、私たちは結末を知っているが、アニメで一人一人の「死に向かって生きる」という意志は壮美で力強く見える。また、恐れは勇気と同様に、絶望は希望と同様に、そして死も生と同様に記録される価値があることを思い知らされる。
　さらに言えば、もっと長い時間尺度の下で私たちも平家が滅亡する運命のような予言の中にいる。私は死について初めて考えた時、「生きている者は必ず死ぬ」という言葉に恐怖と無力を感じた。教科書も先生も、死とどう向き合うべきかを教えなかったから、私は死に関するあらゆることを意図的に避け、「耳を掩うて鐘を盗む者」になってしまった。しかし、『平家物語』はこの人生の必修科目を補う。
　実際に、死は人を絶やすが、死における思考は人を救う。「死から生へ」は、私たちを恐怖と憂鬱の悲観的な存在に追いやるのではなく、生の喜びを増やし、また「いかに生きるべきか」という問題に積極的に答え、より正直な生き方へと引き込んでくれるのだ。死のおかげで、過去と未来の間にある「今の瞬間」の大切さを発見させてくれた。だから、私たちは自分の人生を見つめ、希望を持ち続け、一瞬一瞬をつかみ、たとえ結末が分かったとしても、しっかりと進んでいかねばならない。
　死が先にあることを知っていても、平然と「大丈夫」と言い、「今じゃない」と笑顔で返そう。

アニメ『平家物語』

ワンダフルな毎日を大切に

復旦大学
日本語専攻　3 年
張靖苒

交換留学で来日し、しばらく新小岩に仮住まいをすることになった。ゲストハウスは総武線のすぐそばにあり、部屋にいると列車が通り過ぎる音がよく聞こえてくる。その音が耳に入ると、目をつむっていても、異郷にいることが分かる。

ふと、中国の駅や鉄道の様子、そして列車の音について、何も思い出せないことに気がついた。子供の頃から数えきれないほど電車で旅をしてきたのに、音など気にしたことがなかった。

その電車音に、私はある映画を思い出した。それは、是枝裕和映画展で観た『ワンダフルライフ』だ。「天国」という駅が舞台で、死んだ者がそこに一週間滞在し、その人生における最も大切な思い出をスタッフの助けで映画化する。そして、その記憶が死者の脳裏に蘇った瞬間、彼らは死後の世界へ旅立つ。これがこの映画のおおまかな内容だ。

「天国駅」に来た旅人たちは、実に様々な記憶を選んでいる。妻と公園のベンチに座って過ごした午後、戦争で離ればなれになっていた恋人と何十年ぶりに再会した瞬間、地震で母親と一緒に竹林に避難したこと。

印象深かったのは、75 歳の多多羅君子だ。彼女は幼い頃赤いドレスを着て兄と踊りに行った記憶を人生映画にすることにした。撮影のため、多多羅君子は赤いドレスを着た小さな女優にそのダンスを教えるが、ハンカチをどのように揺らすかなど、ダンスの細部が思い出せず、ためらい、立ち止まり、考える。しかし、ついに満足げな笑みを浮かべながら、兄が見たらきっと喜ぶわとスタッフに言って正確に思い出すのをやめた。それを見た時、私は、ダンスよりも大切な人と過ごした時間や、そこに確かに存在していたぬくもりこそが、かけがえのないものなのだと気づいた。

もし本当にこのような「天国駅」が存在するとしたら、私は自分の人生映画の題材に何を選ぶだろうかと考えた。私はかつて、その人の人生は生まれた時代と場所で決まるものだと思っていた。戦争の時代に生まれた人は、不幸にも戦場へ駆り出され、若くして死んでしまう。高度経済成長の時代に生まれた人は、物の豊かさを享受できるが、激しい競争に明け暮れ、青春をゆっくり味わう暇もない。しかし、この映画は、時代に関係なく、そこに生きる人の平凡ながらも豊かな人生を見せてくれた。壮大な歴史の中の、確かにそこにある日常生活に目を向ければ、同じ人生を歩んだ人は一人もいないことがわかる。

そこに思い至った私はいろいろな音を録音し始めた。虫や鳥の鳴き声、近くの中学校のチャイムの音、部屋のすぐ近くを走っていく列車の音など、私の周りにある音を、異国の思い出として残そうと思ったのだ。そして、短期留学を終えて中国での日常に戻っても、もっと周りの音に耳を傾け、身近にいる人と触れ合って過ごそうと心に決めた。

映画：『ワンダフルライフ』

パセリのような人生

三江学院
日本語専攻　4年
冯欣雨

最近、「これからどのような人生を送りたいか」という質問が友人との会話で私に投げかけられた。その時、私は答えることができなかった。その答えがわからなかった。しかし、ドラマ『カルテット』を観た後、その答えは私の心の中で徐々に明確になってきた。私はパセリのような人生、パセリのようにシンプルで目立たないがその価値を失わない、そんな人生を送りたいと思っている。

ドラマ『カルテット』の主人公である巻真紀、すずめ、家森、別府の4人は、いわゆる伝統的なドラマにおける主人公のような完璧なキャラクターではない。彼らは平凡で、ごく普通であり、それぞれに欠点をもつ人たちだ。しかし、ドーナツには穴があるからこそドーナツらしく見えるように、人間は誤りや欠点があるからこそ、それがその人らしく魅力的に感じられる。彼らが結成した音楽バンド「ドーナツホール」も、その「欠点」という個性が彼らを結んでいる。彼らは誰もがパセリのように目立たないが、その人の持つ個性でバンドを彩り、輝きを放っている。ドラマに出てくる「咲いていても咲かなくても、花は花だ」というセリフは、私にも容易に理解でき、何度も繰り返し聞くうちに、素直なありのままの自分になれるような気がした。パセリは目立たずシンプルだが、役に立っていないわけではない。そこからは、自分自身を尊重し、自分の価値を尊重することが重要であることを学んだ。

『カルテット』の最後には、夢を諦めたある演奏家からの疑問が描かれている。演奏レベルが低く、演奏に向いていないにもかかわらず、なぜ自分は演奏を続けなければならないのか。自分は無用の存在であると感じているにもかかわらず、演奏を続ける意味は何なのか。このような疑問は、現実の人生の中でも存在するものである。しかし、人生は意味がなくてはいけないのだろうか、意味があるからこそ行動するものなのか。ただ単に自分の人生を愛するだけではいけないのか。私は、人生は必ずしも周りからの賞賛や拍手を必要としないと思う。

現代社会においては様々な不安が高まり、人々はますます内向きでネガティブな状態になっている。努力しても成功することなく人生が終わってしまうと感じ、諦めの気持ちを抱く人もいる。また、自分が無用な存在あると感じ、存在価値を見出せない人もいる。一方で、自分の好きなことに興味を持ち続ける人もいる。また、ゆっくりと人生を歩むことを選択する人もいる。このような人生を選択する彼らは決して消極的ではない。彼らは生活を愛し、人生を尊重し、自分を尊重し、自分の愛することのために生きている。私は、このような人生を送ることを望んでいる。そう、パセリのようにシンプルで目立たないがその価値を決して失わない、そんな愛に満ちた人生を送りたい。

では、あなたはどのような人生を送りたいと考えているのか。

ドラマ:『カルテット』

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」
（日本語版）
二等賞作品

理解と協力で幸せな生活へと

広州大学
日本語専攻　４年
林家和

２０２２年の夏休みに、私はクラスメートから上野千鶴子と田房永子の「フェミニズムについて」という本をもらった。

７５ページにある田房の「A 面・B 面」という絵に私は脱帽だった。その絵は、社会にはA 面とB 面があり、社会的な性別によって、人為的に男性を政治、経済、仕事というA 面に押し込み、女性を介護、育児、家族というB 面に結びつけたものだ。それを目にした瞬間、私は大きなショックを受けずにはいられなかった。その絵に、自分の両親を見たからである。

あれは何の変哲もない１日の夜のことだった。その日特に用事がなく、家に一人でいた私の母は、インスタントラーメンで食事を済ませようとしていた。突然、父が家に駆け込んできて、せっかちに「大事な友達が来るから晩ごはんを用意してくれ」と一言残し、せかせかと外にタバコを吸いに出て行った。母は「インスタントラーメンなんて、立派な晩御飯とは程遠いわね」とため息をつき、眉を寄せた。

約一時間後、食事ができ、みんなが席に着いた。その途端、父は満足げに「いい奥さんがいて幸せだな」と言いながら、白酒を楽しそうに飲み始めた。何杯か飲んだ後、父はいつものように酔っ払って暴れ出した。前の年に飲酒運転で父が免許を取り上げられたのを思い出した母は、「もう飲み過ぎじゃないの」と怒りに震える声を張り上げた。私は呆然としていて、何も言えないでいた。

数秒後、父は「仕事に追い込まれる俺の気持ちを、ただご飯を作るだけの女に理解できるものか」と言い放ち、皿を床に叩きつけて割った。「何で私の苦労を理解してくれないの。いつも急に食事を作らせて、私の意見を一度も聞かないで。何十年も家事をしてきた私に、一度たりとも『ありがとう』と言ったことがあるの」と、母は涙声で訴えた。一体どうすればいいのかわからず、途方に暮れた私は自分の部屋に閉じこもった。

その日の両親の言い争いは、私に二人のそれまでについて振り返らせた。両親は長い間、家族のために、大変苦労してきたのではないか。なぜお互いに理解してくれないのだろうか。その疑問を胸に、私はじっくり考え込んだ。

そして、また両親が喧嘩した時、私は自分の言いたいことを二人に伝えた。「お父さん、お母さん、いつも家族のために頑張ってくれてありがとう。息子の私は、二人がずっと幸せでいてほしい。お父さんは、いつも家族の柱としてみんなを支えてくれてきたのを心から感じているよ。お母さんも一生懸命家族の世話をしてくれて、大変だよね。二人とも、私にとって欠かせない存在だよ。お父さん、お母さん、ありがとう」。言葉を終えたその瞬間、両親は私も抱きしめ、涙を流した。

その日以来、家は少しずつ変わっていった。父が初めて「一緒に食事を作らないか」と言った時、母は、「いいよ」とにっこり微笑みを浮かべて答えた。その柔らかく温かい笑みは、まるで日差しが家の中を照らし込むかのようだった。

引用書籍：上野先生、フェミニズムについてゼロから教えてください

私と一緒に歩んでくれる―ドラえもん

大連民族大学
日本語専攻　3年
杨灏

世界は広くて、不思議なことがたくさんあります。無邪気な子供たちと不思議な魔法を持ったドラえもんが、次々とファンタジーの世界を切り開いていきます。子どものシンプルな願いが詰まった万能のポケットに、タイムマシンを乗せて、子どもの世界に飛び込んでいきます。

「ドラえもん」は、22 世紀から 20 世紀にやってきた猫型ロボットで、小学生の、のび太の生活の困難や問題を解決していくという、遊び心あふれる楽しい作品です。子供から大人になるまでの過程では、どうしても思うようにならないことがたくさんある中で、ストーリー中の、友情、親情、愛情など、さまざまな事柄は、私を深く引きつけました。子供の頃の私は、これらの未知の事に夢中になりました。もちろん、今の私も依然として好きです。

一方で、同じ作品を見返してみると、子どもの頃と今では、当然ながら違うと感じることもあります。経験を重ねるうちに、ドラえもんというテクノロジーに満ちたキャラクターのメリットとデメリットがますますわかってきました。まず、のび太の勉強についてです。学生にとって成績はもちろん重要で、毎回０点を取るのが怖くて家に帰るのが嫌なのび太は、ドラえもんに過去の出来事を消してくれるように頼みます。もちろん、勉強のために努力することもありますが、やはりドラえもんの道具を使って近道をしがちです。これは全ての学生が憧れていることです。現実ではあり得ないことですが、そのあり得ないことが生活のように目の前に入ってくるところが、このアニメの魅力です。次にのび太は日常生活で、よくドラえもんから色々な道具を借りて、ジャイアンやスネ夫たちと楽しく遊んだり、時には喧嘩をしたりします。彼らの間には、たくさんの素晴らしい思い出があります。

ドラえもんは子どもたちが望むことを簡単に実現し、絶滅した恐竜を見たり、タイムマシンに乗ったり、奇妙な道具を使ったりすることも可能です。ドラえもんは未来から来たハイテクロボットですが、現実では、実現は難しいでしょう。この点から、作者は想像力があまりにも豊かで、子供たちの無邪気な幻想が、このアニメの中で具現化されたものになっています。ドラえもんのポケットには、子どもたちの夢がぎっしり詰まっていて、私たちの成長に寄り添ってくれるのです。

私はもう大人になりましたが、生活の様々な挑戦に直面しても、心には子供のような純真さと幻想を持っています。『ドラえもん』は不思議な道具だけでなく、友情や夢、勇気の物語も響かせてくれます。人生の道がどんなに複雑でも、童心を忘れずにいることで、忙しい中でも幸せな瞬間を見つけられます。まるで決して消えない童話の夢のように、それは私や夢を抱く全ての人に寄り添ってくれるのです。

作品名：「ドラえもん」

逆風を越えて、前へ

佳木斯大学
日本語伝語文学　3 年
李莹莹

「風が強く吹いている」は大学生たちが長距離走を通して成長していく姿を描いた感動的な日本のスポーツアニメである。物語の中心は箱根駅伝という、非常に挑戦的な大学生の長距離リレー競技に焦点を当てている。主人公の清瀬灰二は 10 人のチームを作り、その忍耐力とチームワークの象徴であるレースに参加することを夢見ていた。寮のメンバーはそれぞれ性格も異なり、走力もバラバラで、最初は多くの人が走ることに興味がなく、むしろ嫌がっていた。しかし、灰二の粘り強さと励ましによって、メンバーたちは次第に挑戦を受け入れ、訓練過程で自分の肉体と意志を鍛えていた。たゆまぬ努力を経て彼らは次第に緊密なチームになり、様々な困難を克服し、最後に箱根駅伝の競技場に立って人生の頂点を迎えた。

「風が強く吹いている」を見終わった後、私は思わず自分が長距離走の経験を思い出した。長距離走は孤独で長いスポーツだと考えられる。コースに足を踏み入れるたびに、周りの世界がどんどん遠ざかっていき、自分と時間との戦いだけが残るような気がした。道のりが延びるにつれて、体は次第に疲れ、呼吸が荒くなり、内心では弱音がささやき始めた。その時、孤独感がますます強まり、長い道のりでまるで自分一人で頑張っているかのような錯覚に陥いた。その孤独は、長距離走が体の試練だけでなく、心の挑戦でもあることに気づかせた。各ステップで自分の弱さや痛みに向き合い、諦めたくなる自分に直面した。その過程で、私は自分との対話を学び、孤独や疲労に立ち向かう勇気を見つけ、そして一歩ずつ前進してきた。ゴールにたどり着いた時、自分を打ち勝ったという満足感はすべての外的な成果を超えた。

作家の村上春樹は著書『走ることについて語るときに僕の語ること』で、ランニングの意義を深く検討した。彼はランニングを一種の自己修行と捉え、ランニングの苦痛こそが私たちに「生きている」という実感を与えてくれるのだと述べていた。長距離走では、私たちはしばしばスピードや距離といった計測可能な指標に注目するが、ランニングの本当の意味は、過程にある一呼吸一滴の汗こそが真の生存の感覚なのである。ランニングは継続的な苦痛の中で堅持する理由を見つけ、何度も挑戦し続けることで心の強さを身に付ける方法を教えてくれた。村上春樹が言ったように、生存の意味は結果や順位などの固定されたものではなく、行動の中に現れるものである。ランニングを通じて私は体だけでなく、心も強くなれると実感した。

長距離走と人生には多くの共通点がある。人生の道は長くて未知で、私たちはすべての転換が予見できず、最終的な結果も予測できない。しかし、コースのように、第一歩を踏み出すことこそが最も重要なのです。出発そのものが人生の意義であり、未知の挑戦に立ち向かう勇気の証である。走り続けているうちに、私たちは徐々に目的地に近づくことができると深く信じている。

アニメ「風が強く吹いている」

萎れぬ桜

北京大学
日本語専攻　修士 1 年

吉妍

二十世紀八九十年代、改革開放政策の実施に伴い、数多くの日本のテレビドラマ作品が中国で放送された。中国視聴者は山口百恵が主演した『赤い疑惑』に涙が誘われたほど深く心を打たれた。当時我が国の指導者は、来中した『赤い疑惑』の父親役を演じた日本の名優宇津井健の両手をしっかりと握り締めながらこう語った：「あなたの演じた偉大なる父親大島茂のイメージは中国で高い評価を得た。」。

私は昔のドラマにあまり興味がなかったが、大学の先生にすすめられ、中日友好の代名詞とも言える『赤い疑惑』を見始めた。物語の展開は私の胸をふるわせ、感動のあまり涙が溢れた。確かに作品は私を惹きつける魅力的な所があると意識した。

主人公の少女幸子が、偶然に巻き込まれた事故で白血病に見舞われた。この不幸な少女幸子の立場から、親子の絆、許されない愛などがシリアスに描かれている。

特に、クールな外見に反する慈愛に満ちた父親、大島茂への印象が強い。幸子の実父でないにも関わらず、養女の十八年間の生い立ちをずっと見守ってきた。医者として、不治の病に罹る幸子を死の淵から救い出さんがために、最善を尽くした。父親として、強さと繊細さを併せ持ち、幸子が悲観のどん底に陥るたびに、いつも暖かく励ましている。このような頼もしい父親がそばにいてくれたら、誰もが心強くなるに違いがない。

また、主人公である幸子の粘り強さにも胸に響いた。無数の若者と同じ、幸せな青春を満喫するはずだった幸子は、難病に苦しむのみならず、恋人が自分の実の兄、育ての親が生みの親ではないなど、信じ難い衝撃を次から次へと受けていた。しかし、そんな彼女はやぶれかぶれになることなく、必死に涙をこらえ、楽観的に闘病生活を送っていた。たとえ余命わずかだとしても、人生の目標を見定め、助けてくれた人々に常に感謝の気持ちをもっており、苦難をものともせずに乗り越えようとしたこの芯の強い姿に深く感銘を受けている。

幸子は最期の夜、桜がちらちらと舞い落ちる小路を、ゆっくり散策した。私はなんと美しいことかと嘆きしつつ、咲いては散る桜を見つめながら、思いついた。桜はその綺麗さもさることながら、その命の短い儚さが私の心を捉えた。花は一週間しか満開しないが、その咲きぶりは末永く人々の心の底に刻み込むだろう。前向きな幸子も『赤い疑惑』も、まさに桜のように何十年を経っても、色褪せることなく、両国間の人々の胸に残り、今やZ世代の私をも魅了させ、非常に心を惹きつけている存在である。

『赤い疑惑』をはじめとした素晴らしい作品は、中日友好関係の架け橋として、大切な役割を果たしている。日本の作品だけでなく、これから中国の奥深い文化を日本に向けて発信していくことにより、中日友好の花を永遠に咲かせるように、我々外国語学習者、再出発しよう！

出典：ドラマ『赤い疑惑』

イデオロギーの枠を「解放」するために

上海初盟教育科技股份有限公司
日本語専攻　修士１年
王璐儿

日本のある古本屋で、私は偶然『解放の歌声』という、あまり知られていない一冊の本に出会った。それは、貧しい農村出身で、中学卒業後に都市部の繊維工場へ出稼ぎに来た16～17歳の女性労働者たちが、1952年から1956年の間に綴った作文集である。第二次世界大戦の硝煙がまだ消えぬ中、冷戦の鉄のカーテンが徐々に下ろされつつあった1950年

代のことだ。「国家の興亡、匹夫に責あり」という言葉があるが、この作文集の中で、若い女性労働者たちは、この複雑な時代に対して自らの声を上げていた。

現在の世界では紛争が絶えず、各国や各民族間の異なるイデオロギーがその根源となっていることが多い。私はよく、イデオロギーの枠組を超えた中日友好は果たして実現できるのだろうかと考える。しかし、『解放の歌声』に描かれた 70 年前の平凡な女性労働者たちの姿に、私は新たな可能性を見出した。

『解放の歌声』では、冷戦的な枠組を超えた女性労働者たちの自律心や知的好奇心が際立っている。当時の日本では、冷戦の影響で「赤」は危険思想の象徴とされ、避けられていた。しかし、それにもかかわらず、彼女たちは積極的に中国の書物に触れ、社会主義の新しい中国に対して好奇心や憧れの眼差しを向けていた。例えば、田中美智子は『週刊朝日』の中国特集を興味深く読み、新中国の青年の理想が職場結婚であり、結婚しても女性が職を辞めずに働き続けることに対し、「やはり政治が新しくなると日本では理想としか考えられない事が一般の人たちにどんどん実現されているのだ」と日記に感想を記している。このように、政治的な色眼鏡を外し、自国を客観視し、異文化を謙虚な姿勢で見ることで、前向きな意見が生まれたのではないだろうか。残念なことに、イデオロギーのみならず社会や文化といった様々な要素があるにもかかわらず、現在の資本主義国では中国を「社会主義国家」というレッテルで一括りにし、多面的な「中国」を理解しようとする努力があまり見られない。

また、この本には女性労働者たちの平和を愛する貴い良心も垣間見える。占領期において、GHQ は民間検閲支隊による徹底的な検閲を行い、「親米」的なイデオロギーが徹底されていた。しかし、そうした報道傾向に左右されることなく、「必ず命中する爆弾ができた事を人間が喜んでいいものだろうか、あの新兵器で朝鮮の尊い若い人命がどんなに多く殺されただろう。」と、朝鮮戦争に巻き込まれた人々に対して深い同情を示した。イデオロギーを越え、私たちは同じ人間であり、喜怒哀楽という人間性を共有しているのだから、異文化交流には相手の立場に立って考えることが不可欠である。再軍備の問題に直面し、『解放の歌声』を綴った女性労働者たちは、「私たちが兄弟を子供を夫を失うことが悲しければ他国だってそうであろう。なら戦争はいけないことも解るはず、そこで私たちはみんなで考え、考えたことを話し合ったらどうだろう。」と、戦争反対の旗を勇ましく掲げていた。日本の右翼が台頭する今の時代において、この 70 年前の平和宣言は一層輝きを増すのではないか。

1950 年代の若い女性労働者たちは、イデオロギーの枠を「解放」する第一歩を踏み出したと言える。彼女たちの「解放」の事業を受け継ぐ我々は、その試行錯誤に学びながら、中日友好の新たな時代に向かって進んでいくようにしなければならないのだと私は思っている。

『桜蘭高校ホスト部』の感想

浙江越秀外国语学院
日本語専攻 4 年
蓝梦轩

『桜蘭高校ホスト部』は、日本の漫画家である葉鳥螺子氏による同名の原作を基に制作

された青春学園ラブアニメであり、2011年に初放送を行った。その独特のストーリー展開、鮮やかなキャラクター描写、そして深いテーマ性を持つことから、多くの視聴者の関心を引き付けてきた。このアニメは、ただ単なる学園コメディではなく、個々の成長、仲間の友情、そして愛情に関する深い議論を展開する作品である。

舞台は名門貴族が集う私立桜蘭学院である。この学院には、美男子による特殊サークル、桜蘭高校ホスト部が存在する。このサークルは、学校の女の子たちに奉仕することを目的とし、様々な役割を演じたり、テーマを設定することによって、女性たちに優雅で華やかな雰囲気を醸し出す活動を行っている。しかし、平民学生である藤岡ハルヒが静かな自習場所を求めて、この「女子のエデン」に迷い込んでしまった時、思いがけない物語が展開される。

ハルヒは、成績が優れており、自立した女の子である。しかし、ホスト部の高価な花瓶を割って、多額の借金を背負うことになってしまったため、男装をしてこのサークルに加入する必要が生じた。彼女の加入は、ホスト部の本来のバランスを崩すことはなくとも、歓声に満ちたこのサークルにも新たな活力を注入した。ホスト部のメンバーとの付き合いの中で、ハルヒの純真さ、天然さ、強さが、これらの坊っちゃんたちの心の孤独と迷いを次第に癒し、彼女自身も彼らから友情、愛情、成長に関する多くの重要な教訓を学んだ。

須王環はホスト部の社長であり、明るく実則的で孤独な日仏混血の少年である。彼は超ナルシストでありながら、俊秀な顔立ちと風情ある話し方でホスト部のエースとなっている。ハルヒとの付き合いの中で、環は次第に彼の優しさと熱心な一面を見せ始め、彼の存在はサークル全体に暖かさと力をもたらした。

鳳鏡夜はホスト部の副社長であり、冷静で理知的だが腹黒い少年である。彼はいつもさわやかな笑みを浮かべているが、背後には様々な陰謀が計画されている。しかし、ホスト社への愛は誰にも及ばない。ハルヒとの接触の中で、鏡夜は次第に彼女の純真さに心を打たれ、心の防備を解き、生活のすばらしさを楽しむことを学んだ。

主役たちに加えて、劇中における他の役もそれぞれ独特の魅力を持ち、忘れがたい存在である。常陸院光と常陸院馨、この双子の兄弟は、わがままな衝動と優しさ、繊細さを併せ持つ。彼らの間の親愛と支え合いは、観客の心を動かす。埴ノ塚光邦、通称Honey先輩は、子供のような外見をしておりながら、心は成熟しており、その愛らしい甘えん坊ぶりがドラマ全体に楽しさを与えている。また、寡黙な主人公の塚崇、光に弱い猫沢梅人、ハルヒの妖しいお父さんなど、それぞれの物語や生い立ちが印象的である。

『桜蘭高校ホスト部』は、キャンパスライフを題材にしたコメディーアニメであり、貴族と庶民の差異や矛盾、そして人々の相互理解と包容力を深く探求している。この作品においては、異なるアイデンティティや異なる背景を持つ人々がどのように影響し合い、癒し合い、最終的にお互いの生命において不可欠な存在となるかが描かれている。このような階層を超えた友情と愛情は、人間性の温かさと美しさを伝える。

また、同ドラマは爆笑を交えながらも、思春期の迷いや成長を描き出すストーリーと、生き生きとしたキャラクターの造形を通じて、その姿を映し出している。それぞれのキャラクターは、それぞれに悩みや困難を抱えながらも、互いに支え合い、共に成長し、最終的にはより良い自分へと成長する。このような前向きな精神的姿勢は、観客に正のエネルギーと積極的な生活態度を伝えるに違いない。

とにかく、『桜蘭高校ホスト部』は一度見てから見る価値のある素晴らしい作品である。それは私たちに、笑いの中で青春の活力と美しさを感じさせただけでなく、友情、愛情、成長の真の意味を感動的な物語の中で悟らせた。この作品はその独特の魅力と深い内包を持ち合わせており、多くの人の心の中での定番となっている。

---『桜蘭高校ホスト部』

自分ならではの流儀を貫く――ドラマ『半沢直樹』を見て

北京第二外国語学院
日本語翻訳　博士１年
万里鵬

「やられたらやり返す、倍返しだ！」

この人の心を震わせる言葉は、この数年間、いや、これからも長い間続けて人気になっていくという人気ドラマ『半沢直樹』からの名セリフの一つだ。それにドラマで何回も聞かされたわけか、与えられたスッキリ感が、抑えきれないほど半端なかった。

初めてこのドラマを知ったのは、大学一年生の頃だった。そのタイトルからは別に何の特別なハイライトもなく、最初ただ普通の気持ちで見ていたが、見れば見るほどまるで何かに引っ張られたかのように、どんどん見続けていきたい気分がどうしても収まらなかったのだ。

一体どこがこのドラマのチャームポイントかというと、やはり人の共感を呼び寄せるところであろう。裁かれるべき者に天罰が下り、弱小な方が逆転勝利するのもあくまで想像の世界にあることで、現実にはそれよりはるかに厳しい事態が溢れ満ちているのではないかと思っている。

上司に絶対的な威厳を持つ日本職場では、上下関係が厳かだということが一般的だと言われている。「誰に対しても会釈をすること」、「上司より早く帰らないこと」、「ホウレンソウを徹底的にすること」など、様々な暗黙のルールで日本人のサラリーマンにプレッシャーをかけ続けていることが明らかだ。しかしその一方、そのプレッシャーから解放できる手口がなかなか見つけられず、皆は放っておくしかできない。その結果、仕事で心のバランスが崩れるパターンが決して少なくないというのは確かだと言えよう。

まだその時の自分は所詮大学生なので、それをあまり感じていなかった。今は大学を卒業し、一人前の社会人になった。今のところ再び『半沢直樹』のドラマを振り返ると、改めて現実の厳しさを痛感した。日本ではもちろん、中国の職場でもルールの共通点がたくさんあることが分かってきた。私は現在、社会人ならではのドキュメンタリーと言っても過言ではないぐらい、自分らしき生き方を貫こうとしている。これは本当に『半沢直樹』のおかげだ。そのポスターにある「クソ上司め、覚えてやがれ」というセリフもいつも自分の心の中で響いている。高がシンプルな一言だが、この世界のどれほどの人間かの裏に潜んでいる本音や怒りを叫び出したものか、その心境はひしひしと伝わってくる。

日本でも、中国でも、職場は決して侮ってはならないものだ。むしろ厳しいルールが設けられているこそ、その国の発展の礎になると言えるだろう。自分はこのドラマを通じて、日本の職場について結構学んだ。もちろんドラマのようにはならないが、せめてこれからも社会人として、几帳面に仕事をしつつ、人間関係を上手く築きながら、自分の価値をできるだけ活かせていきたいと思っている。特にこの数年間コロナ禍の影響で、世界中にカオスになった今、自分ならではの流儀を貫くことが大切だと、今更一層強く実感していた。ところが、絶望の中では希望が生まれる。その希望と半沢からもらった勇気を胸に、今後鮮やかな人生の道を歩んでいきたい。

（『半沢直樹』福澤克雄監督）